



令和 8 年 8 月 3 日
校 長 富 川 麗 子

伝える力を探究する

OHP シート

私が教員になりたての頃、研究発表といえば OHP (オーバーヘッドプロジェクター) シートを使うのが当たり前でした。透明なシートに手書きやコピーで文字や図を写し、光にかざしてスクリーンに映し出す。失敗すると、そのシートそのものを破棄しなければならなかったり、修正するにも工夫が必要だったりして、一枚のシートを作成するには時間がかかりました。しかし、あの光の中に浮かび上がる文字を、今でも懐かしく思い出します。先日、若手の先生方にこの話をしたところ、「それはどのようなものですか」と不思議そうに尋ねられました。OHP を知らない世代がもう当たり前になっているのだと、時の流れをしみじみと感じました。ですが、道具は変わっても、「相手にどう伝えるか」という悩みは、いつの時代も変わらないもののようです。

紙芝居を知っていますか

「紙芝居」という言葉を聞いたことはあっても、実際に見たことがあるという生徒の皆さんは、案外少ないかもしれません。紙芝居は、日本で古くから親しまれてきた語りの文化です。木の枠でできた小さな舞台に何枚もの絵を差し込み、演じ手が一枚ずつ絵を引き抜きながら、その場面に合わせて物語を語っていく。かつては、紙芝居屋さんが自転車の荷台に舞台を積んで町を回り、子どもたちが集まって駄菓子などを買いながら、次の場面を心待ちにしたそうです。テレビが普及する前の時代には、子どもたちにとって大きな娯楽であり、学校教育の場でも活用されてきました。今では、幼稚園や図書館などで、読み聞かせの形として親しまれています。絵と言葉、そして語り手の間合いだけで、聞き手の心をぐっと引き込んでいく。とても素朴でありながら、実に奥深い表現方法なのです。

私自身、少人数の方を対象に説明を尽くしたいときには、プレゼン資料をノート形式に作成し、「紙芝居形式でご説明させていただきます」と伝えて、説明することがあります。紙芝居は、一枚の紙に、伝えたいことを描き、めくりながら語りかけることができるとともに、相手の目を見ながら、間を大切にしながら語るという、伝える力の本質が詰まっているように思います。

三つの伝え方を比べてみると

パワーポイントは、文字や図、写真、時には映像までも自在に組み合わせられ、大人数への説明や、正式な発表の場に適しています。修正や更新がしやすく、視覚的な効果も豊かですが、スライドに頼りすぎると、話し手と聞き手の間に画面という一枚の壁ができてしまうこともあります。OHPは、透明なシートに描いた図を光で拡大して映し出す、いわば一昔前のプロジェクターです。電気と専用の機器が欠かせません。しかし、手作りならではの温かみがありました。一方で、持ち運びや準備に手間がかかり、動きのある表現には向いていません。

そして紙芝居は、電気も特別な機器も必要ありません。絵を一枚ずつめくりながら、聞き手の顔を見て、間を取り、声の抑揚だけで気持ちを届けます。大人数には不向きですが、少人数に丁寧に語りかけたいときには、これほど心に届く方法はないかもしれません。どの方法にも良さがあり、誰に、何を、どのように伝えたいかによって、選び方を工夫することが大切なのだと思います。

生徒の紙芝居プレゼン

先日、「トビタテ!留学 JAPAN」での留学を決めた本校の生徒が、「ぜひ見ていただきたいプレゼンがあります」と校長室で披露してくれました。「トビタテ!留学 JAPAN」は文部科学省が進める留学支援プログラムで、その中には、スポーツや芸術の分野において自ら問いを立て、その分野のさらなる発展に貢献することを目的とした探究活動を留学計画に組み込むコースがあります。面接で審査員の方々に留学の目的を説明したというプレゼンを見せてもらおうと、なんとスケッチブックにプレゼン資料を貼り付け、紙芝居形式で語ってくれたのです。落ち着いた語り口、聞き手の反応を確かめながら間を取る堂々とした姿に、私は心を動かされました。何より心を打たれたのは、その生徒が、留学先でも自分自身の探究テーマを掲げ、好きなスポーツという分野の発展に、自らの力で貢献しようとしていることです。本校で育ててきた「探究する心」を、海を越えた場所でも大切に持ち続けようとする姿は、まさに本校が目指す学びの姿そのものだと感じ、心から頼もしく思いました。

伝える力を、探究する

宇宙飛行士であり医師でもある米田あゆさんは、現在、国際宇宙ステーションなどへの搭乗に備えて、日本やアメリカで日々厳しい訓練を重ねているそうです。米田さんは、医師として病院に勤務していた頃、通信制の大学で美術を学んだこともあるといいます。その理由は、人に説明する機会が多い仕事だからこそ、どうすれば分かりやすく伝わるのかを、学びたいと考えたからだといいます。誰も経験したことのない宇宙という世界に向かう今も、その学びはきっと生きているのだらうと想像します。人に伝えるということは、何とも奥が深いものです。

本校の授業の中でも、発表するときの生徒の皆さんの姿には、いつも感心させられます。資料の作り方、声の届け方、相手の反応を見るという配慮。そのひとつひとつが、実は立派な探究のテーマになります。「どうすれば、もっと伝わるのだらう」。その問いこそが、九段探究プランが大切にしている学びの姿です。豊かな心で人と向き合い、知を創造し、未来へ貢献する力は、こうした日々の積み重ねの中で育っていくのだと思います。3月には、探究発表会が予定されています。皆さんが、どのように工夫を凝らして「伝える」のか、今からとても楽しみにしています。

